

和光の植物の歴史とヒロハアマナ



日本固有種で、本州の関東地方から近畿地方、四国に分布し草地や疎林の下に生育する。植物学者牧野富太郎博士が発見した武蔵国のヒロハアマナについて「チュウリップラティフォリアマキノ」という学名を命名した。

牧野博士主筆の植物研究雑誌・第5巻第3号には、昭和2年4月3日、北足立郡新倉村にて撮影されたヒロハアマナ群落の写真が載っています。「ヒロハアマナ」は牧野博士が注目した植物で、博士が住んでいた練馬の住居（現牧野記念庭園）からたびたび新倉の谷中地区を訪れ博士の主要な植物研究の地であったと言われています。



牧野富太郎植物研修雑誌の表紙裏に写真と共に掲載された「ヒロハアマナ」

樹木や草地に自生している様子（昭和2年4月3日 武州北足立郡新倉村にて大谷君撮影寄贈）

1998年谷中地区面整理事業がはじまり、この地の開発前にヒロハアマナの球根を掘り出し、球根を集め、樹林公園や民家園、富澤湧水斜面上部などに移植し、絶滅から救出し、現在も保護、保全を続けています。現在ヒロハアマナは日本の絶滅危惧種に指定されているユリ科の春植物です。3月初旬、白い筋が入った2枚の葉の間に白い可憐な花を咲かせ、4月には実をつけ、落葉樹が葉を茂らせる季節には球根を残し地上から姿を消します。写真は1999年5月5日新倉の谷中から球根を掘り出しているところです。梅林だった木は伐採されていました。



牧野
ワールド
を巡る

第 35 回

牧野富太郎とヒロハアマナ(続)

練馬区立牧野記念庭園学芸員 田中純子(本会会員)

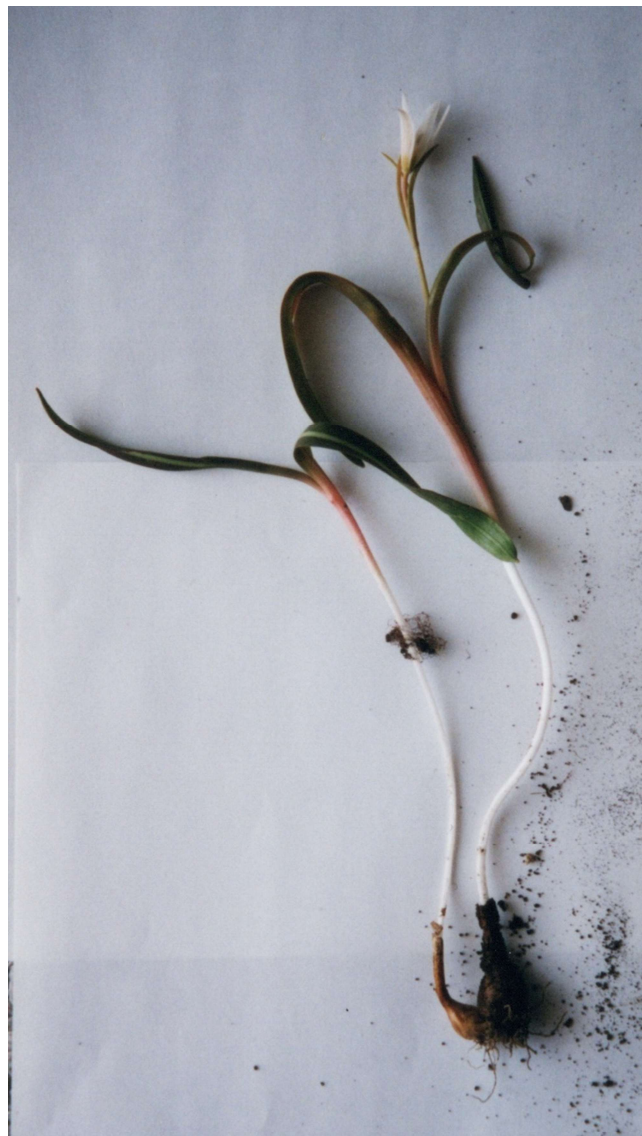


左：図3 ヒロハアマナの図(高知県立牧野植物園蔵)

(6) 新倉のヒロハアマナ

新倉については、本田より以前に、牧野が『植物研究雑誌』(5巻3号 1928年)の口絵に、1927年4月に武州北足立郡新倉村で撮影されたヒロハアマナの写真を載せている。写真には、大谷茂が撮り牧野に寄贈したと書かれる。新倉村に同植物の自生地があるという口絵の情報は、その後大いに役立つことになる。

新倉の谷中地区では1998年に区画整理事業がはじまることになり、その直前にNPO法人「和光・緑と湧き水の会」が同植物の球根を掘り起こし、樹林公園など市内数か所に移植して絶滅の危機を防いだ。その経緯は、同会発行の『和光の緑と湧き水』(2009年)や同会の会報誌『和光の緑と湧き水だより』(2022年12月号)に記録されている。会報誌によれば、同会がヒロハアマナの情報を得たのは、この事業開始に際して埼玉県立自然史博物館学芸員太田和夫が上記の口絵を示したことによるという。



1999年3月24日 新倉の谷中で湧き水の会が採集したヒロハアマナ

(7) ヒロハアマナの標本

牧野はいつごろ新倉の自生地を知ったのか。それを調べるため東京都立大学牧野標本館に行き、現存の限りでは最初の標本が1899年に志村(現東京都板橋区)で採集されたものであることがわかった。志村は1905年の標本もあって、台紙に貼られた紙片には「牧野富太郎」の名がある。新倉村に関しては、1907年3月31日の標本が複数見つかった(図4)。



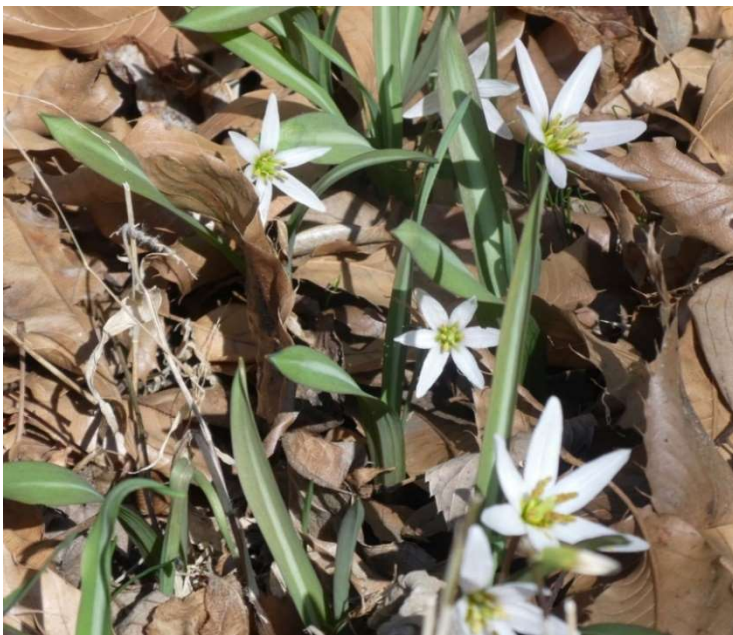
他に、1928年4月9日に膝折(現埼玉県朝霞市)で採集した標本もあった。前回述べたように、牧野が1914年に学名 *Tulipa latifolia* を発表した際には「武蔵国」という産地名が記されるので、志村や新倉村の採集品が記載のもとになったと推察される。

和光で著名な清水かつら氏の記録した特産植物の項に、「広葉あまな一明治 41 年中、理科大学教授牧野富太郎氏により発見せられ、本村（新倉村）特産にして日本中何れの地にも産せずという」との記述があります。牧野博士が清水かつら氏を案内したことが伺えます。和光の特産植物として、私たちもこれを引き継ぎ、1999 年に移植し、自生地を離れてもヒロハアマナの群落として保護してきています。



樹林公園では、2021 年秋からメリケンカルガヤが大発生し、刈り取りが遅かったためヒロハアマナの森やその周辺に一齐に広がってしまい、メリケンカルガヤの根が広がり取り除けませんでした。今後ヒロハアマナの生育に影響が出るかもしれず、継続観察が必要です。

樹林公園ヒロハアマナの森にて
2018 年 3 月 11 日



富澤湧水の斜面上部に移植したヒロハアマナの様子。

クヌギの落ち葉から一齐にヒロハアマナの葉が出て開花した状態で、生き生きとしていました。ここに根付いて広がりを見せてくれそうです。

富澤湧水斜面上部のヒロハアマナ
2022 年 3 月 12 日

特別緑地保全地区に指定されている富澤湧水の斜面上部では、湧き水の会の会員が保護区を設けて、踏み込まないように、笹刈りなどもして、ヒロハアマナを保護しています。ここは市内で最も湧水が多い所です。和光の湧水と共に、武蔵の国で発見された「ヒロハアマナ」を育成して、将来に残していこうと活動しています。

